

## 第8回 魅力と活力ある県立高校づくり検討委員会

日 時：平成19年9月7日(金)

13:30～16:00

場 所：サンラポーむらくも 2F 彩雲の間

### 会長挨拶

この春から夏、そして秋にかけて、内外でいろいろな動きがあった。そういう中で、日本社会のあり方について議論するたびに、社会や地域における教育の重要性が改めて指摘されている。教育について、もう少し世の中の知恵や力が集まらないものかという意見も聞こえる。

この検討委員会も8回目になった。そろそろ本題にかかわる本音の議論に入ったらどうかという意見もある。きょうは、そういう意味で本題に入るが、ここですぐにまとめるということではなく、この本題について大いに意見を闘わせて次回に備えるということである。本音の議論ができるのではないかと期待している。

### 教育長挨拶

あいさつは省略し、意見交換の中で言わせていただきたい。どうかよろしく願いしたい。

### 出欠確認

#### 事務局

本日は、多々納副会長、曾田委員、寺本淳一委員、福井委員、藤原委員、宮内委員、宮脇委員が所用のため欠席で、14名の委員で議論していただくことになる。また、本日は教育次長の稲垣庸が出席している。

### 議 事

議題(1) 県立高校の配置について事務局から説明。(資料1)

## 委員

これは平成11年11月30日に出した再編成基本計画をそのまま継続するという考えか、全部御破算にしてもう1回一からつくるということか。

また、資料の内容について、例えば安来市の付記には「学校数及び設置学科の検討が必要」と書いてあるが、鹿足郡には「学校のあり方」となっており「学校数」とは書いてない、受け止め方によっては誤解を生じるのではないか。

## 事務局

前半の質問については、今ここで議論していただいて、前回の基本計画をベースにすべき必要があればベースにさせていただいていいし、考え直した方がいいなら考え直していただければいい。皆さんの活発な意見交換をお願いしたいという気持ちでいる。

後半の質問であるが、検討する上で、このようなことも考える必要があるのではないかという趣旨で記載したものである。これも皆様から活発な意見をいただきたいと思っている。

## 委員

10年前に平成20年までの計画を策定した。それが未消化のものもあるのに御破算にするというなら、この前のように3、4年をかけてしっかり検討しないといけないのではないか。ここで急に高校の配置をどうするかと言われても、発言できない。

## 教育長

この検討委員会に対する諮問文を見ると、前回の計画をどうするかという方向は明確になっていない。適正規模等の客観的な基準はそれほど変わらないだろうが、各地域における生徒数等の数値がこの10年間で変わってきたことから検討をお願いしてる。全部をひっくり返して新たにということではない。前回のものをベースにしながら、その上に今日的な問題についても検討を加えていただきたいということである。

## 委員

検討するのはいいが、「学校数及び設置学科の検討が必要」ということばが出てしまうと、学校数を検討しなければならなくなり、大変なことになるのではないか。

## 教育長

表現にひっかかりがあるなら、本日の資料は、会議が終わった時点で回収し、差し替えさせていただきたい。

## 委員

資料に、平成30年度の中学校の卒業生数が6,131人になるという数字が出ているが、この6,100人という数は過去のいつごろの生徒数と同じなのか。その当時の学校配置数も参考として教えていただきたい。

## 事務局

前回の検討委員会の資料として「県内の中学校卒業生数の推移」をお示しているが、過去に6,100人以下またはこれに近い数字はない。ちなみに昭和50年以前では昭和23年の1万2,208人という数字が1番少ない。

## 委員

当時の高校は何校ぐらいあったのか。

## 事務局

昭和23年は、旧制中学から新制高校に変わった年であるが、公立高校の全日制課程で本校が35校ある。現在の本校の数も35校である。

## 委員

学校規模の問題については、11年度から20年度についても、最低4学級が必要という方向は出ていたと思う。ただ、11年度から20年度まではまだ余裕があったが、今回シミュレーションしてみたら、4学級を下回る学校が地域によってはかなり出てくることわかった。

生徒が少なくなると、その地域だけで4学級を維持するのは困難である。そのとき、場合によっては他の地域から生徒を呼んでくるような秘策なり、学校づくりなりをしていかないと、4学級は維持しようがない。そういう意味で、21年度からでも必要な施策を新たに実施するのかもしれないのか。そういう視点を残すのか残さないのかということが重要で

はないか。

### 委員

右に揺れたり左に揺れたり迷いはあるが、私は地域における高校の存在ということを重く考えたい。私が住んでいる町から高校がなくなり、子供たちの姿が町から消えるという状況を想像すると、地域から学校を消すのは非常に望ましくないと思う。

県境の方まで行くことがよくあるが、空き家がふえて、人が住めない地域をよく見る。東西に細長い島根県で、人が住んでいない地域がふえていって本当にいいのかと考えると、地域の学校をなくすことだけは何とか避けたい。

外から人を入れる方策としての定住対策や、条件つきで島根県の高校生になってもらうような留学制度等を具体的に練っていかないといけないのではないか。

### 委員

特に中山間地域では、学校教育が地域の文化水準を維持しているという面が大きい。そういう意味で、私は地域における高校の存在という視点に力点を置いて考えたい。

先ほど示されたデータを見ると、県境に近い地域は県外への流出が多い。それをどう食いとめるかということも1つの課題である。

遠くから矢上高校の農業科に進学した人と話をした。その人は、家が和牛を飼っており、小中学校のころは、共進会があるたびに学校を休んで連れて行かれたという。そのことが友達に恥ずかしかつたし、先生にいうのもつらかつたという。だから、高校に行ったら、そういうことが胸を張って言えるような環境で勉強したかつたと言っていた。つまり、生徒が集まってくるのは、その学科なり学校なりにそれだけの魅力があるということである。

議論の中で表に出てるのは数の問題だが、本当の論点は、やはり魅力のある学校や魅力のある学科をどうつくるかということだと思う。

### 委員

自分たち大人にとってではなく、高校生にとって魅力のある形を考えないといけないと思う。もちろん地域の人たちとの触れ合いも大切だが、それも考えた上で、私は学校規模という視点が高校生にとって大切だと思う。

もし自分が高校生だったらと考えると、部活動がいろいろ選択できたり、いろいろな人

と触れ合っって切磋琢磨できたりすることが重要。教育内容という面でも、学校規模があった方が望ましいものになると思う。地域をもう少し大きくとらえていく方がいいのではないか。

### **委員**

地域における高校の存在という問題も大切だと思うが、1学年1学級の学校を残しておいても生徒にとって魅力はない。だから、中山間地域でも、何とか1学年4学級程度の学校がつかれないかという発想でやらないといけない。

6月の終わりに吉賀町に行ったが、交通費の支払い通知を見ると、松江から新岩国を経由する計算になっていた。確かに地図を見ると近いし、車でも新岩国から1時間足らずで着くということだった。そういう点を生かしていけば、新しい魅力ある学校をつくるという面では、松江よりも吉賀の方が工夫の余地があると思う。

地域の中学生の数が減るから、その中でどう高校を存続させるかという数の話だけしていても難しい。

### **委員**

別紙の1の3つの視点は相互に関連するものであると思う。

ただ、多様な個性や価値観との出会いが高校生にとっては非常に重要だと思うし、中山間地域で子供の数が減るからといって、そういう多様な価値観との出会いを犠牲にしても今のまま高校を存続させるという発想でいいのかと思う。

やはり、変えるべきところは勇気を持って変えていって、新しい高校教育を模索していかなければならないのではないかな。

幼児教育の現場でも保育サービスに対する要求が強まり、こども園という制度がつけられた。確かに、地域の思いはひしひしとを感じるが、こういう時代の動きの中では教育のあり方も変わっていくものである。高校教育も、子供の育ちも含めた新しいあり方を模索していかななくてはならないと思う。

### **委員**

最初にこの会議に参加したころは、物づくりという立場から地域を大事にした高校づくりをお願いしようと思っていたが、途中から自分の高校時代や自分の子供のことを考えて

気持ちが変わってきた。自分の子供が高校を選ぶときは、やはり遠くであっても進学校に進ませたいと思うのが親心だろう。

確かに地域から高校がなくなることはとてもつらいことだが、中山間地域で学校を存続させるには、その地域になくってはならない学校の魅力を地域と学校が一緒になってつくり上げないといけないと思う。

当初の気持ちと子供のことを考えたときの気持ちと、少し揺れ動いている。

## 委員

例えば隠岐の場合、何十年も前から、成績のいい子供が進学校と言われる松江の高校に進むという流れがあったと思う。それを認めてきたベースが隠岐の人たちの中であって、それは多分安来や雲南も同じではないかと思う。

難関国立大学とか有名私立大学の合格者を出すのがいい学校で、そこに入れない子供たちは地元の高校でそれなりに、という考えがこれまでであったと思う。それを何とか変えていかないと、いつまでたっても隠岐の優秀な生徒は松江の進学校へ出るという流れが続いていくのではないか。

介護の現場で選ばれるデイサービスは、お年寄りに多くの笑顔が出る場所だと思う。学校の場合も、子供たちが輝くような教育、そういう教育の中身が大事になってくるのではないか。

## 委員

一般論をやっていって、具体的な学校数をどうするかと急に言われても、議論にはならないと思う。前回つくった統廃合基準ではまずいのか、変えないといけないのか。そういう議論が必要である。それを曖昧にしたまま数を決めると大変なことになるのではないか。今、委員の中に具体的なイメージはほとんどないと思う。こういう状態で高校をどうするというようなことが言えるのか不安を感じる。

## 委員

過去のことに対する再検討なしに未来のことは話し合えない。ぜひ次回、前回の検討委員会の内容をお聞かせいただきたい。

もう1つ言いたいのは、大人の視点だけで議論が進んでいるのではないかということ

ある。どのような生徒を育てたいか、どのような学校にしたいかという、大人の立場での意見ばかりで、本当のところ子供はどういう高校に行きたいのかという視点があまりないと思う。もし本気で考えるなら、県下のすべての中、高生を対象に、どんな高校に進学し何を勉強したいか調査すべき。子供が最善の利益を得るという視点を忘れてはいけないと思う。

〔休 憩〕

### 事務局

休憩前に指摘のあった前回の検討委員会の検討経過であるが、第1回検討委員会の資料として、前回の検討委員会の答申と、その答申を受けて策定した基本計画を配付している。

また、現行の統廃合基準や適正規模については、第5回の検討委員会で、その考え方を説明したが、特に異論はなかったと記憶している。

### 会長

私も大体そういう記憶である。したがって、ここでの議論の出発点は、これまでの計画をすべて御破算にして議論するというのではなく、新しい変化が必要なら、それについても考慮に入れて自由に議論していただきたいということである。

### 教育長

地域から学校が消えることが大変な問題だということはよくわかる。ただ、客観的な数字が表している現実にも大変厳しいものがあり、そのあんばいをどうつけるか毎日考えているところである。

さきほど特色ある学校をという意見が出た。たとえば横田高校はホッケーで頑張っているが、引き続き今の戦力を維持しようとする、ある程度の学校規模が必要になる。そうすると、例えば県外からでも生徒が呼べるぐらいの特色ある学校にしなければならない。どうしたらそれができるのか。必要な教科や学科をどう守っていくか、いろいろなことを考えながら、検討していかなければならない。

## 委員

魅力のある高校をつくるためには、以前からの流れを踏まえながら思い切っためり張りをつけるべき。たとえば、都市部に中高一貫校を設けて、将来の日本や島根県を支える人材を育成する。最終的には、県全体として見たときに、いろいろバラエティーに富んで魅力のある高校ができたというふうにするべき。

## 委員

どの高校もそれぞれ一生懸命やっているが、輪切りにしたら、輪が大きかったり小さかったりという規模の違いはあるにしても、出てきた形はどこも同じということが多い。一概にそれが悪いとは言えないが、島根県の高校の特徴としてそういうことがあると思う。

全県にいろいろ特色ある高校があり、トータルに見るとバランスがとれているという配置を考える。その上で、1つ1つの学校を見ていくことが大事ではないか。

## 議題（2）新しいタイプの高校について事務局から説明。（資料2～3）

## 会長

「県立高校における生涯学習社会への対応」「県立高校における特別支援教育への対応」の2件が議題として予定されているが、時間的に難しいと思われるので、次回に議論いただくこととしたい。

## 委員

中高一貫の資料の「設置する地域や学校の要件をどのように考えるか」というところで、生徒数が比較的多く、中高一貫校以外の選択肢があるかということがポイントとして指摘されている。一般論としてはその通りだと思うが、例として上がっている五ヶ瀬中等教育学校は山間僻地であり、前半の議論にあった中山間地域における魅力ある学校という意味で非常に参考になると思う。

## 委員

これも前回のところですべて議論し尽くされたことである。中高一貫にしても総合学科

にしても、平成20年までに通学圏域に1校つくと明言されている。

中高一貫は、平成15年に松江市立女子校に併設型を入れるとされたがうまくいかなかった。総合学科は、大社高校に導入する方向で決めて、平成17年から入れるはずだったが結局だめになった。そういう流れを踏まえて島根県としてどうするのがよいか、もう少し資料を出して説明しないと議論が深まらない。そういう説明をせずに、ただどうするかと聞かれても、委員のみなさんは何とも答えようがないだろう。

松江農林高校は、たくさんの投資をして改革し、子供たちがたくさん来るようになった。魅力があるといって集まってくるようになった。そういう発想を教育委員会や島根県もぜひ持っていただきたい。

### 教育長

学校現場の方にそういう意見が多いということであれば、なぜ専門部会の意見として、きちんと議論した結果が上がってこないのか。

総合学科というものが、かつてはとにかく導入するという流れだったが、今は少し立ちどまって考えたらという方向に変わってきた。そういうことだと思う。

中高一貫教育についても、何をねらいにするかが必ずしも今明確になっていない。導入するなら、何を目的にするかももう少し明確にする必要があるということで、今までの取り組みを一回立ちどまって総括し、次の展望を開くための機会にしたいということだと思う。

### 委員

中高一貫教育は、飯南、吉賀、邑智と導入してきたが、いわゆる僻地校と言われる学校で地域と一体となった教育を実践し、それなりの成果は上がったと思う。ただ、入学率が大体50%にとどまっているのは、高校側に十分な学級数がないためすべての科目の先生がそろわず、子供もほかの高校へ行かざるを得ないということがあったのではないか。

私が要望として言いたいのは、都市部に、英才教育という方向を明確にした中高一貫校が必要だということである。そういう視点で教育委員会としても考えていただきたい。

### 委員

私は公募委員になるときに、中高一貫教育をぜひ導入してほしいと言って委員になった。と言うのも、学力向上ということで各高校で頑張っておられるが、なかなか結果が伴わな

い。高校1年の初めのところで中学校の復習を延々としなければいけないという話を聞いたり、実際に子供の参観日で英語の授業を見たりして、中高一貫を導入すれば、中高の教科指導の連携がよくなるのではないかと感じた。ぜひ検討していただきたい。

## 委員

総合学科が、普通科と職業学科を統合した新しいものであるなら、総合学科の専門家をつくらないと肝心のコンセプトが見えてこないように思う。

「課題となる点」を見ても、ここにあるような課題が出るのは最初からわかっていたと思う。重要なのは、そのメリットとデメリットの中で、総合学科というシステムをどういう生かすかということで、コンセプトが明確になっていないと、どうしてもこういう課題が残ることになる。だから、これから総合学科をどうするかというときには、総合学科についてのスペシャリストというか、それを専門的にやる人がいないと、魅力あるものではないと思う。

中高一貫教育についてもやはり同様のことが言えるのではないかと。例えば高校の先生が主体で中等教育学校をやろうとすると、どうしても中学校の先生と議論がかみ合わない。やはり、中高一貫教育校をどういう学校にするかというコンセプトを明確にしてやらないと、結果が出ず、評価もなかなか上がらないということになる。

また、「小中学校への影響」のところでも、受験競争の低年齢化につながらないかという指摘があるが、今の島根県の現状からいえば、むしろ小学校にもう少し刺激を与えた方がいいのではないかと個人的には思う。

## 教育長

中高一貫を考えるときに重要なのは、東京のように無理すればどこからでも通えるところと、島根県のように通学範囲に限られるところでは、置かれている状況が違うということである。そういう島根の実情の中で、私立学校が先鞭をつけてやってこられたのだから、これをもっと伸ばす視点だってあるのではないかと。そういうことも考えながら、公立学校で一貫教育をやるべきかという判断をしていかなければいけない。

総合学科について1つ魅力に感じているのは、専門高校から上級学校へ進学する生徒のことである。専門高校からはことしの春も半数近くが進学している。そういう進学を前提に専門高校でどういう教育をすべきか考えると、総合学科が1つの視点になる。普通高校

を総合学科にするのは、施設整備の投資コストという点で難しいが、専門高校なら既存の施設を利用することが可能である。これを今後も進める必要があるかどうか、検討しないとイケないと思っている。

専門高校の卒業生のかなりの部分は県内に残っているが、取得した資格とか勉強したことがそのまま生かせる受け皿が用意できているかと言えば疑問である。島根の経済界なり産業界なりが求める人材の、資質なり能力と数の問題をどう考えるか、きちんと議論していかないとイケないと思っている。

## 委員

松江の高校に行かないと進学できないという人もいるが、横田高校は在籍160名で、毎年、4、50名の生徒を国公立大学へ進学させている。京都、大阪、神戸、九州等へ毎年複数の合格者を出しており、生き残りのため最大限の努力をしている。

また、地元で高校を残すためには地元の努力も必要であるし、その努力もしている。

そのためにも4学級ということにこだわっている。少なくとも4学級が、進学できるための、社会と理科の教員を配置するための最低必要な数だと思っている。

## 事務局

次回は10月18日木曜日の13時30分から15時30分を考えている。その次は、11月12日月曜日の午後を考えている。

## 教育監挨拶

いつもより長時間にわたって協議いただいた。

きょうも核心に迫る提言や地域の実情についていい話を伺った。私は義務の出身であるから、幼稚園、保育所と同じ集団で上がってきた人間関係を、小学校で1回壊して再構築するということで随分苦労した思い出がある。その人間関係が中学校へ、そして地域の高校へとそのまま引き継がれていくのはどうなのか、少し危惧を感じる。現実には、ある中学校では、あの人があ的高校に行くから、私はこちらの高校へ行くというような話も聞いている。そういうことも含めて、特に中山間地の高校のあり方について、これからもいろいろな意見をいただきたいと思っている。